

タイミングが遅れましたが、4月18日、19日に開催されましたジュニア連盟主催の北海道カップに網走から参加した菊地コーチの原稿が届きましたのでご紹介します。文章の端端から常連校ではない、初参加校の初々しさや、意気込みがうかがわれます。

北海道カップに参加して

網走市立第二中学校 菊地 学

第2回 北海道カップに参加させていただきました。昨年1月に行われた第1回の北海道カップの際は審判員として参加させていただきました道外のチームを間近に見ることができました。その時には、まさかこの大会に自分のチームを率いて参加するとは想像すらしていませんでした。実際に道外のチームと対戦できたことは、北海道の中でも地方になる私たちにとっては貴重な経験であったとともに多くのことを学ばせていただいた大会となりました。その中で感じたことを少し述べさせていただきますと思います。

全国の中体連大会や都道府県対抗のジュニアオールスターの大会を見ていつも思うことは、「どうやったらこのようなチームになるのか?」ということでした。北海道の中体連大会を勝ち抜いていく「素晴らしい」チームが全国の舞台に出ていくなかなか勝ち抜けないでいる現状を考えると、「何か大きな違いが存在するのだろうか?」と考えさせられます。今回、直に道外のチームと対戦してみて強く思ったことは「意識の差」でした。私たちの所属する北見地区は未だに中学校から全校大会へ出場したチームがありません。それどころか、私が指導を始めた頃は全道大会に参加してもなかなか勝てずにいました。当然、「全国出場」などの目標ではなく「全道出場」という目標になります。

今回、対戦させていただいた「八王子一中」も「藤浪中」も「全国でいかに勝つか」を考えていました。「八王子一中」には都府県の垣根をまたいで練習試合に多くのチームが集まってくるそうです。「藤浪中」は全国各地に呼ばれて試合をしているそうです。「全国大会に出場する」のではなく「全国大会で勝つ」ことが目標であり、そのために選手は厳しい練習に身を置き、日々取り組んでいるのだと思いました。全国大会を見ていると前半で15点も20点も差をつけられても、後半の3P、4Pで追いつき、逆転してしまうチームをよく見ます。自分達のプレーが上手く行かなくても我慢してディフェンスし、後半にわずかでも相手が隙を見せると、その隙を突いて自分達のペースにしてしまう。そんなタフな精神力は日常の意識の中から生まれているのだと思いました。

もう一つ私の中で感銘を受けたことは、桐山先生(八王子一中)、鷺野先生(藤浪中)のバスケットボールの指導に対する情熱です。桐山先生は今年度で定年を迎えられると聞きました。「現在の子どもたちは、教え子の子どもたちの代なので孫みたいなものです」と温厚な静かな口調でおっしゃっていました。一日目の試合終了後に八王子一中をモデルに講習会が行われました。その中で先生の言葉遣いは決して大きな声を出しての指導ではないも

のの、要所所で指摘される厳しさ的確さはさすがとしかいいようがないものでした。

鷺野先生には懇親会の席で技術的な質問をさせていただきました。その際にはわざわざ立ち上がって説明をしてくださいました。また、ベンチでの選手を励まし称える姿は見習わなければならないと感じました。両先生ともにただチームを強くする、技術を教えるということではなくバスケットを通じて子どもたちを育てるということをととても大切にされているのだと思いました。そして、そのことを長い間続けていくことは簡単なことではなく、私自身の姿勢を改めて問うものとなりました。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました北海道ジュニアバスケットボール連盟の役員の皆様、審判員の皆様、対戦した各チーム、TOを行ってくれた地元の中学生など多くの人に感謝したいと思います。ありがとうございました。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会